



十種燕石

老む多のーみ

五輯

五

イ曾
679
48



679
48



老のたのしみ三冊ハ俳優市川古柏造自筆



五世白猿小傳ヲ蔵書ヲ享和元年辛酉九月

廿五日木倉重次郎白猿孫小傳あり狂言堂

主人是を借り得て予小見せしむ抄書し

一本をねしむ願書此朱字を予が考なるを

享和二年壬戌七月十六日

山東舎主人

三代目柏庭父の名を
継いでオ牛跡とも号
せり

老のたのしき抄

享保十九寅年歲旦元日寅の日也 庭洲や東の方小蟻蛇先のい
こむ オ牛 目黒より梅の影をとりひて 田境の垣をなけれ
重梅 オ牛 母人きりんよく江戸あり年取取ふされ大晦日さる
へ由出あり元日翁海一見物嵐三たの見物ふ初を目見へ我
等引合三たの口上先年伯父三たの由當地ふ拜りか時を西崎五たの
とやいかに丹前と申事由座か夫成ふ方と致してそま方の内ふ花ふ嵐と
中をりめん横由氣ふ合をちい三たの河を通りか時ハヤレ嵐が通る
いふ河ししと由さるひふ影をい極まより直ふ苗字を阿らたぬ嵐

嵐三たの

三右衛門守山三代まで一層元仕ゆもお江戸町中様より何事と苗字も
らいいねと難くをなぬ内名深の園十郎同前お由をいきを形よ
難居此役城と十郎五郎で内よりまをれども因次いりしが先首
分てごよりゆをる園十郎此実の才志やお母より由をいきを
多れみよ上りまをる

正月六日より二番目出三右衛門見世大入也二三日評判より
三右衛門をいしとかれまも持病の評判しとくくくる下初て
なまといし評判あり是難見世病氣をいふお勤人氣くとけ
すゆい

正月廿七日も國松をいしお山なる方松浦内徳居孫内入と難何れ

以。一漢。ふお合さ。一十のり大馬屋由お成り酒氣取道をくらむき
駱をぬみく。一を。一ひ

正月廿日京沢村長十郎病死年六十余死戒名貞譽宗慶寶永六年
十月初日滋田若十郎病死戒名天蓮社十譽一宜長十郎戒名の序
兵四郎不関書付ク

二月中旬より行徳く鯨或中寄り江戸より見物群集おを日けて
廿日おおどき鯨見物の。一もそのり被り舟の中りたを
但昔死よみおふ廿日としておを今年を山統の。一も又
ハ子此伯父一是見狼の女而買色く去年より世統も狂ふは組
近松門左の姓は杉森名信成宣平お堂お梅子享保九年辰、十月

種年代記六日トアト
非ナリ
是ナリ

廿七歳余して死を法名ハ阿耨院穰矣。且具足居士辞世
残まとはおもふもあらう埋火の事ぬまけりある朽木ハきりて
右ハ今昔操年代記の出上下カナキ

行徳ハ鯨の家一時三月上乙ノ序テ汐下ノ敷向を

馬刀ウツヤ々トシラ此海をこるの海 才牛

鳥の跡 新哥さるる石六巻後 睦^{ヲ田} 希光たちより其名やこころんをむ人

右多登れ時の夕顔の宿葡萄葉の心をよみ侍をさるふれあへく
夕日影跡りしなをやりあふりしききりて侍をさるる

人の追善ふむの字をゆめふれきを春の虫といふをとおあへく
わうたれをこころの地ありそこころがられ小蛙あへくあり

久米平内右衛門

狩野如川曲書ふら至 誠角ト出いりも奉書を但一唯の紙を

も田宮安多辰物語かん^{三樂元}らん^{若川カ}やうせんハ名人のよ

稲葉の長取次役山波みちると云人吳風の物語あそ右を武士

の像を作し浅学のちゆまは今の久米の平内右衛門是也今ハ其人

の子孫稲葉家ハあきよりそは知樂院とて浅学も上野

此末もあはれ無かちのよそ知樂院ハ又右ハ熟怒りて地内小是を

立右平内右衛門ハ又右ハ其名をきそ其名を樂しめ形之とを

京言水公家庭へ召されて常坐 召まおもこれ室暖のうしき

うか 言水 不角又公家庭へ召されて

折らぬともけり 家をさうぬりきくう那 不角

荷葉子代役先の先祖ハ子供の哥ふうとふたり友近の乙娘と
いふそ左近也大津左近といふ信長宗使といふと語らまは
其角古筆是ハたらそよめぬ所やうよめたり

「木嵐のふくそかきれ城の月 其角

今年京洛少り望江戸高き所をちかづけりてまききぢらん
の集をゆりんぎやとて江戸をたの四月上旬迄三月下旬迄
五月八日朝雲津水國病死辞世の句

さ月まぬ人も柳ふ佳し一以とそ病床ありま水をき
ひて書おきよし

同九日辰松江研多病病死十りとむらじ

同日雨天朝素丸丈出子息の追善の招物内持系

同日晩雨丈一轉をたくるそ取湖十高ふ湖の評点燈并鱗追善此
は心う井一りとおと

小野幸右の貞佐物語水國御金たの九十布事右と貞佐門人の由
子葉いしくむそいも教也むを紙の海をうもりそ角や嵐雪
かきいしくむそいもあいつりあはなりあむあやうなまのぬたま

花見車ハ轍士作踏水と信と貞佐物語平鱗追善今これ知と

五月十四日笠翁より返るり来る是も七十余也

貞佐物語水國去ん頃其角の歌のつり文書をもとと免物所ふ知
よそ中とを貞佐知ると亘人あ物のみ巻の由亘人の今と二方ふあ

子貴のけのしと此伊勢水國たー川田局とてとめつるは
是を里郷とて

報恩謝詞集と云本阿るよ一是ハ我物諸公報本と云もの
めていたきくと源兵衛清次郎お諸松風坊殿の中より筆報本と
由文庫のむきりつる由一おといは名阿るくと清原市は前一あり

祖忘梅初年養翁福居
三年宝永六年
郷へ後英一蝶と
稱一享保七年七十
一歳なる

五月廿一日雨降り市登居るを度あて人考をきむ向ふ小屏風
某のおお一並屏風の蝶牛馬の画あり市が好むも初年を書き
七十一歳と有り市法しく思ふふり今年四十七を一蝶の年かく
らふれば今年を五十五とせ七十一歳ありあらんがたのしき
あり七十一歳を画の筆に極細筆をふのしきしやとてふ名物の述

龍水 勝間氏
書家也

なる常小生紙や一ありりあく七十一をせ生ぬしりもや阿るべき飲食酒
色氣の持ふし又有なきもせそ飲汁五市ハ龍水も阿る新車
字々周々扇ありそお大文字も数くあつふ好く新車方より
此紙貴む猫小蝶を望新車方よりぬのあり貴むうを山返を

「葉庭の花と柳の胡蝶うか 徳并

朱引の右所中ハ名在右中ニ書の名左ニ今年号法する名在ハ
所望治法の名メ

「朱硯や水をすりるの仙翁花 才牛

貞肇單直道大徳 俗名 松本の四郎 享保十五庚戌五月廿五日死

六月四朝白雲をほとくきん子親 才牛 ほうきんしと記き 翠扇

杜宇ほごんうけしる目黒くら
瑞め花さけのちふ座を
居て翠扇の錦女小白髪ぬを
予ハ茶をのみて多の
正月やうき衝より何とち
まある

ハ以隣聖朝と明主院と系
嘶居ハ東江戸トを
あちまある母人
きらんよく家内をの
れを恨み文あり
うき花をさるる
西隣
聖朝と予と極る
そたより小昔
あつた
つ以
細子ハ高見
世光へき
白ひどもふみ
どかきや
あて見世を
おあり
堺町
大さ
とき
の
う
や
り
き
人
と
ら
ん
の
う
文
を
あ
り
知
ら
せ
ま
あ
る
長
十
神
御
千
より
紙
書
き
あ
書
何
して
何
ぢ
さ
い
や
あ
れ
を
目
黒
の
あ
る
座
を
予
お
も
い
り
し
西
江
ハ
元
暦
の
札
を
さ
け
て
あ
ぬ
建
武
の
札
を
さ
け
て
世
を
や
ま
ん

楓窓批五月九日
六月行ふ小御
カチ余アセ見

世を予ハ目黒ふ身をい
て細子ささぢを
知らせられたり
や目
黒の心易の田舎住居や
くづさう
水学清一江戸より
とハ國を水学清一
事ハあき都の
因をまぬま
たり
五月九日
瑞かぎや
あちま
あつた
湯屋
府ま
た
た
ら
や
ハ
好
惣
住
翁
予ハ古余元小名
そ日暮る
佐内
あつた
秋明
ケ目黒
あつた
同十
方
院
の内
を
清
く
あ
つた
四
つ
さ
以
増
よ
大
僧
正
祐
天
と
ハ
西
來
か
馬
光
西
道
堂
ハ
西
宗
た
ら
し
予
ハ
前
西
道
予
ハ
あ
つた
十
念
頂
戴
少
あ
つた
の
因
よ
る
ハ
あ
ち
ま
あ
つた
予
ハ
老
母
ハ
予
ハ
離
れ
涙
を
あ
ほ
り
き
向
ふ
佐
察
和
尚
ハ
西
主
宗
明
主
院
よ
る
宵
ハ
毛
せん
と
あ
つた
それ
ハ
信
心
の
内
教
さ
ら
と
せん
う
し
や
あ
つた
信
心
の
内
教
と
離
れ
即
興
西
江
の
因

寺宿
僧都

とらさよわきこと 戊午 先年六月秩父札のとき途中の
大僧正幡隨意上人の目見しと十念の意を付 念仏の念に
おれまほきことと申すは向夫近ふ又西の伊勢多
して神思を感涙せし甚古哥を思ひてあしをかれ亦あやと
思ふ涙のこぼれし右の吟あり

同十古歌あり五つ時晴早川神歌一ありあはあはは
まやあまも死しよきこと 念仏世の中やと歎をり
望國あれ人の世生れあはれ ね月つるふ代能は美濃
武郡松見寺といふ尼寺の仕女を菜花み水汲むのありか
禪の上まをして 終は悟るが初らきと ちと巧桶の地とねけ

て水たゆらねが月もやとらと ともみたる世よふふ代能を
カイトルニ桶はそこねけて水もあらねがうきも那と是てあはる
代能の傳といふものありあの通は哥也右即念仏安心決定詮義本
八月八日夜の内より大風雨未だ小室を衝を目まふを九つ時より
晴而わひまは翁老人へ文通宗多衝をを紙の扇子五人と右徳ノ
由来まををを何に仙真考耕新水十町也右は津輕中隠居
翁細子の島巻さう上は相教の因はほあひたる三解り
同十古歌風抄し又古風抄しと唯中ハ風強く抄し
此月とらととと又雨ふるあり豊の茶

むさしーのふ山風りなきふの月 戊午

名月や跡るあつきの甘庵 研 翠戸扇

名月小笠頭の内いぢづあり 徳并

夏夜雨後も大嵐之きれども臥内をなす母伯母中機人よくよき

月見あり此巻あり祝儀の三月予格のふん巻 翠戸扇 此格ハお

日里御よりある宿船の水からり 徳并 林間酒を飲つむる 街

ト此人紅葉の石巻 瑞女 からり 御平次 雪川の巻 十四市 菓子一折

長印 栗の巻 あつち 菱の巻 之由 松浦の内隠居候ふくくら白糸法と

しつて拜領客を湖十金八お申おあげ鞍の市たるせうをうどつ口

布重巨布抱奥取明ききその日ハ明月也二る所ありけるゆへ

風雨良夜小もぎりうらば魚の店をあげある 是のみ地雨を

くいて月を輕 七牛 大河ら一室内のきつを月や 翠戸扇

同廿五の曇夜貞室此けとの湖十持糸銀三両小とを

同廿九の小雨ふる人睡目黒ふ十友の巻を初づけ一籠母人の巻を

晦のあはれも入さずき大きふうけの湖蒲のきと見えて東側

二間曉雨子つるる

九月十二日晴天羽魚丈の印石巻を并短冊の事も云巻を今日母人

目黒の内中機人よく由中夜小寝ふ入市紀来る志ま元の祝儀小

初を法以てふ繪の巻を初むる夜月晴明也四時以湖十一初今

貞佐死去のよおるる

同廿九の晴天笠居んも入るるき九るりありける蛇の次布左の病死

貞室の巻

竹下子バア高利金ヲ
カニタル老ナリ
武野俗談詳ナリ

十月九日晴天里々暮るも居座を擱り繪を拵系しやふらふ
十月廿三日は初之神十初は昔所よりあるよりし由竹の子がら
金のり也

享保廿年正月歳旦松はまき梅志ありと明の表 牛 あり
よや悦馬明の表 翠扇

二月七日晴天を入武野武野より札堂切りいり明の表と注紙おは
同日事始め雨ふる大入は朝笠翁居見へ志らく芭蕉翁の居
室の物語枕青涼川のとも成尾魚川を武野よりて墓所のこしらふ
ぬく巻を巻て何れ武野居程も入登き米入也松風子鮮才子
の見次めて米あくあねバ又へありもし才子よりの米も遠て松を

芭蕉庵話

これ丸町

き時ふく明れが自もことめふらまうがそは笠翁子の世に元田の
時のよ一翁の六十有餘の老人と云ふ由そは翁を四十年前の人を
笠翁翁も嵐雪居もごりくおてこれふも町足結庵の東に角
翁の所ふお居るふ笠翁翁居るも嵐雪もかま人少く三人居
らまひすし嵐雪をあども俳情のおは翁をまひし遊あといふ
山田結のお氣が法よりたしあらぬおとく翁のここの高
き人あり今大炊翁の像の衣城きせふども笠翁翁よく是ふよ
常は茶のつむきの八徳のこ着やこれいそこ其角山嵐雪の教具
あどハなきころらくあるらりしゆ一翁の佛はんハかを丸く堀
ぬき内の砂利を敷出心のまやこれ像をお立せらる由まのあ

たりみくろと笠公相わうろそんそ角嵐雪あど千鮮狂風あいの
見次のうーひ笠翁子を出物を見物

芭蕉翁の庵堂和泉寺柳中家末庵堂新七友の料理人のうー笠翁物語

二月廿二日湖十を狂風出合あり

同右書富園を佐万句奥新川崎やそそ散り金五十疋をそそ

新丁や阿とも平沙のむさうり 女牛

肩玉や地村うら押をーらんども 徳弁

晴ふく日一月寺より開帳の布を佛にも僧三十人留むうひふ出
てきらびやうぬるく徳弁の師匠義好丈もあも僧あそぬおひし
母人も回向院やそそ新法も僧思えらぬ回向院の開帳の中徳新

北野開帳あり

三月十日東や福引は新浦船屋外を希るそそ大け

同十六日晴天西側下機あそそ白山様の中徳居見物やを内尋らぬ

五(せう)くの中徳駕のうーうーいまあそその中意能くそそ也此徳

居の先年 吉良様の中徳を中徳義の中勤るぬそそ家るぬ今ハ七十翁

たりきのふ十五の秋湖十夫婦を唱びよるちを擧ぶ

同十七日湖十お糸中院様大小の吟の哥享保在年大小あり大の吟

松竹と梅柳の花星糸菊のやあより年をくれぬる 小の吟

きさらきや後のやよひの阿あそそ水各月葉月をるきふり

四月六日常照院一茶五ふ回向院開早天ふりく晴天也

大僧正内入りも有り我十九人と別にお目見し内云々云々云々これ老母の
春坊のうしと内意也とあるは若し折々とも知つて居るよの内意也
内坊より園十部をよとの内意なり人斗り内意なり難事也
同日三番目初て天気より新程云初幕引んとり時折曉
卒中風其初雨泉中も

元文元年十二月十日朝立佐倉七丈婦次を去り内方様(内意云々)
従ひまを野句成さし上り右の内袖の内換棟あり内袖の上は
句之内裾換棟小基盤といひのり

蓬来や櫛白く初暮盤
柏送
これ石岩法師や福壽子
曰

白梅小黒約いふむ野極うか
曰
内海是のより五難き也

元文五年二月十日晴天想ふひ秘古山身尊之合也初とて秋
入もしやう春の秋とみうく夜明未志らみ仕舞や立役中通りも
遠方の者の起しけ或ハ樂屋丸京床其秋の解を訊しむ水其
跡き又五布衣人の身始を空後よりめ起してたおれ目をやうも人
く喘が氣がつうして心付しり予則駕心籠を云付治急衝を付て需事を惟ふ
おらうこふは星程の事初何にせもいふ者し初あく其上如水
ハ如例見物是も大老人あり昼々見之ゆる初入焚ゆやうの物も何
知不知もく初初如水老のお火神一もあき灰もあつて初も火

のけふー何にそのをふ居ふがう老人といひ念に拾おのんつやと
其心きひあー市見うて吉助の言月火御火をこくといれて如
水老人の言へをを小建の者其致通し小町して直ふ程をとりま
小物も喰を飲の目も寐を解をいはうと又うふ思ひを
お方々をち紙をりて皆ふ食しむかほどのふ何にわも人を
いふ心あー市余をかきりて之外うぬ書とむか心づき
右何にの末をんりて是東あー市余のやぶらうあるものふまき
と云え其上表後人言も樂句へ見まらに是いつゆても想ゆらふ
見まらふあー市かたも一人つひ見まらふ事也
程を紙すまらう市相も各や相も師をの月夜を何らまらうの

老えの方より

座元あつらう市
あつらう市下何れ

三月十五日晴天雨の暁雨丈短冊に取らふ書り程を
同廿日晴天長慶院様此見物西側七名法き夜ふ入大黒倉十九方一入
市と少長あつらう市傳多解るらんらん市夫永剛あつらう市
暫く出合曲を夫と取り入三邦ををを中徳居柳口つあ小内立
同廿二日晴天大入大さう市さう市方より白加賀或是来る
同廿三日市紅死を前の日市見舞元氣だん下をねを喰ををける今日
段仕着て行折市之浦あつらう市跡より見まらふあつらう市
のよあつらう市小町しむらうの所也年もよるたり市紅追言「花菜
種黄あつらう水を墓つらう市」市紅仍年五十七大甲子ノ年あり

楓窓抄曰身五月
市と作らう

こむらね 翌年の事

五月六日晴天又大入ささぎ 舞臺仕所ありなど大入舞臺の舟ささぎ
へつり 道具の仕を人これ自由あらば 引道具より 引道具車連束るを

寛保元年四月十日晴天 小田近江 内番行の事
ヨッキヲの二字看せん 小つりは 小つりの

楓意抄柏道大坂
り今年を
歳旦の句類

同十五日大入大棧を 杉竹田氏 掃蕩 足舞出千近江父子へ 送ひ
く 物語能 漢の及ふ竹田氏 出雲 當年の 歳旦 舞臺 見よを 不
り 舞 不登 中代の 去 十 當年の 歳旦 狐 つけく 小も 小め ば 任
松より したういふ 春 院あり 列坐と とい 集まき 子 冊が 集之 ば 集 申
沢 深い 子 跡 され け かけ つ 古 杉 風が 句 な 是 以 数 句 切 字 あり

老能の句も 加る けり 但小サキ 本 極 予 が 所 持 の 句 多 書 奉 ぶ れ けり

人の 去り けり 涼 危 とい 世の 園友が 別号 也 甫と 八 東 潮 改 名 也

寛保元年八月廿五日晴天 大坂 杉竹田氏の 初 入 棧 交 互 極 せん ぞ

八月十五日 秋の 吟 也 石 山 せん 月 柏

寛保二年四月朔日晴天 也大入を 杉竹田氏 所 持 の 句 多 書 奉 ぶ れ けり

京江 市 同 道 如 鼻 子 ちよと 見 入ら 如 鼻 子 之 ら けり 外 の 局 也 小 額 の

小 さん 居 ちよと かり 酒 呑 ちよと 予 と 酒 呑 ぬ ちよと 酒 の 心 小 さん

云 子 村 の 神 ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと

ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと

同年四月十日晴天 小田近江 三十九日

同年八月廿四日の夜新町新屋へ来りしよりきやうは柏木病氣
見舞茶世も多快病氣あり二人とも出でし所にお蝶同及居る丈総
角向と出で何申越しまるゝ京都の名物 水菜 女深物とを計
寺と豆腐園の思ふ松茸

大坂の名 栢と和州城白入屋屋揚屋 天王寺 若小石屋栢木屋

江戸の名物 鮭鯉比丘尼むらさき 生ナマしシ 大名山路ねぶ大根

元文五申の四月廿九日少し雨より後晴天は古田魚川へ棧敷

とらいぬや

同年七月十三日晴天は秋風五夜は蕙翁筆此柳をよとて代筆也哉

さしシ 大むる 津のあや冬 菜うり 栢青

楓葉抄は系中五十三の
次にかきし

口蕙翁のガケモノ
楓葉抄は系中五十三の
五十七乃次へ入し

同年八月十日考花出生産若御指二篇より月十五日名月快晴

安くと海ふか川らや男の子 栢道

九月十三日快晴 後を巧く月影多し 疎麻 栢道

寛保元年八月廿七日晴天是居大入大棧敷は晴天は文樂屋へ出で沖中
文相よりしを顔見世の團一蝶の画父子数句を書

顔久世や富士も筑波も朝日山 栢道

顔久世や 曙白き 柳 此花 三針

寛保二年三月廿九日是居是居形は新町へ出で方へ源助花世如五市金
三回丹吾ハ森田屋右へ振出ありき次ると源佐直系り神シきりきり
也予う羽織上は社地の古樹を多此シカカ目出成りとも之御額の或は六字

但し後セナル孫麻の
句は年外五市金の
地

楓葉抄は系中五十三
八条の次へ入し

丸石書居淡信去 如是有菜種の花畑也

「表の旧改淡信吉しうらきや」相送 後そ淡屋へはちま多勢く

近月なる外小書竹内柏木小多をこ入もらひ又柏木へ予ら扇

一散句書きそ

同晦日晴天は皆書居さあやくせうやへり物入白人をよ玉牙の僅也

金吾もや外小武人六万きくあどこのよりま人の江戸吉原よまあす

名をよまれう舞子小松も一屋ありまよりう町白人へは河東といふ人

大群あうしき女帝ありはる屋は天和屋字右の三外うやえふある老人也

是らわしし水木辰くゆあり

四月朔日晴天大入大しき也きり里は五次をさる風種人よる散句白自筆を

京の洋判江かいこへヨ
り水木 菰野 芳沢 袖崎
とを女飛の四天王水木ハ藝
ヨりの秋野ハ名はとき
云々ハ淡ハミロウトヤ

我うへ送る ゆる 泉雨をけるせし 神さくらら 半時尾

同十五日晴天大入びり 鯨文唐人の相その本持来

五月廿日曇り雨ふる大入大しき之東側二日つき 菖蒲吉夫見物ける 樂を

里は引合あしキニサといふ俳人桂子の傳をよけしある 古ふ京へはる由扇

子をし予ら散句改ら精る 表小百合の表武首その裏小予が言はの

句のせまる 則書をたらふ

七月廿日晴天新羽を大入機密之是合景清は秋花戸吉夫を多をこ

入もらひ 宵ふ是代やの見世を悦ぶあしそ 秋ハ新鐘へまやくもたら

お平少悦ぶ逢ふハトリモナ悦が心はうひ也

同十六日大入桂子大入え 十テいと云尼ある 一笑金のう十八涌のあたり

予ハ三升のウチハ 堂へ小園扇をきひ多むわらう

同十七日 出世本ノミオハクノコトスム

同十九日 西の三少し悦見お菓子を取こも新經へ切取めあかりホク
ニ逢ふ於蝶がトリモチ予ハモドリミナカコヒニテ逢ふ

同廿日 予が方へ船出て芦竹丈ハクホク芦竹の逢方万世於蝶ヒキフ不都
を夫上より左夫三味線引き坊をあととふのりて新經へ船中少く盃を
とらへ何申の家のおまゝ船中少く景徳の上よりを語る

同廿日 晴天少く風吹京より堀尾のおまゝ又おふり

寛保三安年十二月廿二日 晴天 拜堂。舞鶴。故一少。拾所。予也。後平次。
予ハ原町おやきへ内庭拜ふ所十町と予ハ先へ出て雜司谷へ参りサイ

三ヨニ目白へ参りまを定八幡の神社殿を通り拜して高田馬場へ出て夫が
新橋の御所堂へ参り 堂を舞鶴少く逢ふ連立して先へ出て中
村吉之助へ出合月より内風呂へ入程に料理多かり明七付返書

寛延三安年五月晦日 晴天 松屋へ参り舞鶴系扇の扇をきき
を重し 繪ハ競馬の侍也お換極なり 左を縁原の本所り 横敷を
先をききその為ふら耶 柏送

同年八月廿七日 晴天 列禁へり予夫帰線所谷去帰して二式歌をま
りヤと云々直人船入平次も参り佳士大崩大浦政子の妾富めも同所之
先きの名持ハ龜城大おまゝ龜城大を相の若し菓子を入る魚のねくふ
ゆよりあまのいあらばうたどけお古丸をささるいぶさりまをれと

龜城即別返一古めらる葉子といのむとあるらき筑ふゆとを
ふらき 山佳作 柏志

三月廿八日つぎの夜を快晴脱今日甲子たるを敷焼日好始て堺町へりヤケ
原のテイヲミテ我花のやきしを坪とあらむればうららも二ツ孫を
こむ又そこの小巻さし掛ナドラえて「これやよめはも通るも早御流
汁も砂しやう名も知らず」一笑してゆる志を「有て去水て去るは
淡を去水ふところより坂東又布布が方へ足病の状と淡く川舟を
トック成顔カルフカノ草居お龜酒者を送る布光年年の歳信濃若
老古へ来臨の時川中島を志ぶ團扇をういて印染ふるちの書り
数句「らめて来ひ河中島の志ぬ團扇」何心もなく我若流の上

をそよあをを二葉一たるは善光寺町の雛をふワキヲ付てそ外敷
句ワキナドあぐい小鳥を借し「うき予を後ゆりてふと思ふ右の敷
句ナニトヤラ雛遊自替貝の柳小同ユニサテたくなむべきあそそ後を
心を用ひき年遠過て今年延享三の宮年八月十日の秋林素
房おへ雛遊ふは米仲即懸也予う句中小「狐の背中接る名はあ」夜
戻りてげゆ「たもふそ耐ふりり役三途川の姥をほと居ぬ宮中も
討ふ喜多妙法もよく右の句何とやら評判もき山のりてほめといふ句自替
の柳も連流のたもひし「もも何うあんくを鳴る自サテ心ようつらむ宮
祓を多しあむ手事」八月十日の如き書けりとのあり

延享四年四月十日晴天三浦道山よるの夜ある舞當一宮年

玉ふきりまのほろ此繪すかかろく瀧をのそみまふ即刻読めをも
うちほやと豆小松の紅葉物 柏道

同年十月十日晴天大入はる佛師まると樂やとそふふ道ひ我はる
夢をみるすとい所て富士へせんまをうひくくゆくと語る大の悦
ひ心ふたもふと佛師の志るくあり京法を来春佛工の子ま
有叶一丸

同年日月十日晴天顔見え大入道具かごるくき所なりけり樂
屋へ丸小松松たふまふすも知る人ふある丸小松が羽織を母女とも
ふ見もるそ秋丸小松の跡の所へ春紅粉めて白の形を紙へ
押しくくすか落句をたごるくきてをも大鵬の羽折芳しを松

同年十二月雪晴はる菅原多葉粉入を求む

武苑曲と云俳書り屋の季吟天和二年三月と何屋巻頭乃
落句翁あり梅柳さごるくく一田うふ女う那 桃青

右巻中小秋夜話隠林雨冷小羽折を松の葉あらん 其の角

同巻中よそ角松くくきの哥何屋

元文五年申十月朔り笠翁見物すか矢の根五命を細工のく
ふ見ふまは漢海や右巻二日銘あつて物語りなる屋

江戸ふて家の用山

あをまふくく十花 成田也生の人
元祖の父

ありあふくく重花松の男あてくまふてせんむの長巻物 唐

大
りん十右衛門あど友あぢれす

元祖市川團十郎 三外

元禄十七年二月十九日死去
能楽ハ推ガ本才磨の門也

元祖團十郎梅旭生の七歌ふるびそと付るハ一層犬十右衛門
名付初やあま

二代目團十郎 三外

後小父の幼名を津守工と號と
梅旭ハ後の名也吾子其角門人也

三代目梅旭ハ初を孫あて左太右衛門といふも此れ一られ也
三代目梅旭ハ初を孫あて左太右衛門といふも此れ一られ也

三代目團十郎 三外

梅旭ハ此娘也

二代目さうせふとこの幸四郎を四代目團十郎とらぬあり
四代目ハ先このりや勘十郎の二男を元祖梅旭幸四郎

此世子と成又團十郎と成と初とあり大和屋ハ元
祖幸四郎の家名あれをわあ〜せん子をねりて岩井
半屋初十七歳少初て家をこ〜と〜時大和屋をゆげし
も此あり

後あび屋
五粒

楓窓梅旭丸梅旭ハ
梅旭ハ二代目梅窓
ト云ミシカラハ白猿と
梅旭ハイトコナラン金
次布デ、ハ、トハ如
何

四代目團十郎 三外

十八才の源海丸と云おめ川とあり
後あび屋梅旭

海丸梅旭ハ白猿梅旭之則金次布のぢ、梅を梅後のうら
学ふ書月お〜とのん

五代目の子
六代目 三外

五代目の孫い〜やあまの子なる

七代目團十郎 三升

金次郎殿、母

享和二年壬戌七月十七日抄書於燈下畢

右老の多のりみ抄書全を冊に束む人、かゝるもとめて文化
改良の年仲夏

公務の閑をぬきよみより、抄書さし、この也

右の巻帖ハ柳塘録主人よりかゝり、あて一観せし、思ひよ、この巻
よも、何ら、福ハおのゝ文庫ハ納めんと、致さし、燈下、抄書
つ、抄書も功を畢るものあり、文化新元小春

右老のたのしみ抄一卷、写半、撮ふ二世團十郎、相違、元禄元年
生十七歳のとき、元祖團十郎死を、於、宝永七年、洋判記二世相違
を、今、團十郎といふ、書、俳優の、新華といふ、と、終、二世を、見、ふ、思、ふ、も
の、な、を、惜、み、治、才、錯、札、と、て、讀、み、つ、き、あ、ま、多、く、お、り、ふ、抄、書、せ、し、も
此、あ、や、ま、ま、り、た、り、し、抄、書、も、元、後、の、隨、筆、と、し、よ、り、案、理、あ、き、く
書、中、舊、文、を、と、く、事、ハ、簡、明、と、し、能、く、せ、り、海、の、史、を、お、も、む、も
その、必、ず、事、ハ、何、ら、ん、た、り、し、辭、を、れ、誰、か、た、め、み、り、い、て、ん、や、

文化改良の年仲夏 楓窓主人記

千時明治十九年初冬

筆者

妻木頼徳



